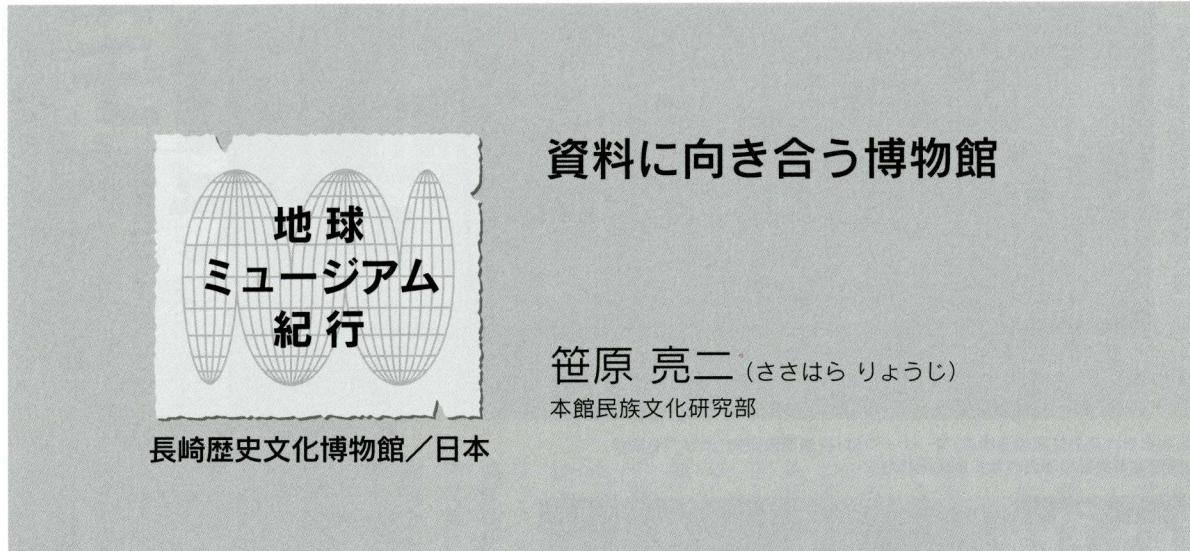


資料に向き合う博物館

笹原 亮二 (ささはら りょうじ)

本館民族文化研究部



長崎歴史文化博物館／日本

博物館がさまざまなイベントを盛んに催したり、開館時間を延長したり、パーティーや会場に貸し出したりといったことが目に付きだしたのは、それがカタカナの「ミュージアム」とよばれ始めたころだったようだ。確かに、同時代の人びとのさまざまな利用に供し、開かれた施設となることは重要である。しかしその一方で、わたしは何となく違和感を覚えていた。

先日、長崎歴史文化博物館を訪れた。二〇〇五年開館のこの博物館は、二〇〇六年一〇月号の本誌でも紹介されていたように、長崎県と長崎市が収蔵資料・費用・人員などさまざまな面で協力して作り、管理運営に民間企業による指定管理者制度を採用した新しいかたちの博物館として話題を呼んだ。しかし、実際に訪れてみると、単に新しさだけが取り柄の「ミュージアム」ではなく、大変いい勉強をすることができた。

この博物館には「資料閲覧室／長崎学相談コーナー」があり、博物館が所蔵する長崎関係資料を閲覧することができる。資料は書庫にある図書に止まらない。収蔵庫にある古文書や絵図なども、事前申請が必要な一部を除けば、行ったその場で閲覧ができる。その日は月曜日で、隣接する県立図書館が休みだったの手を煩わせて終日調べものをおこなつた。

収蔵庫にある大正時代に作成されたある島の郷土誌の原本を閲覧したが、コンピュータで検索すると、近年刊行の同名の図書があつた。そこでそれを見せてもらうと、その島に住む人が原本を翻刻したものだつた。その人によれば、原本は島には存在せずそこに唯一残されていたので、それを基に翻刻すること

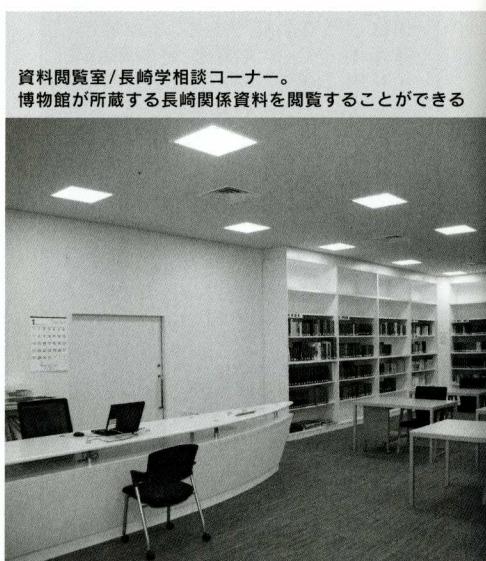
できたのは、これから長崎の島々について学ぼうとしているわたしにとって、非常に感慨深かつた。

やはり、博物館は積極的な収集による潤沢な資料の蓄積と保管があつてこそとつくづく思う。利用者に向き合っていても、資料に十分向き合っているのだろうか。わたしが近年の「ミュージアム」に対して抱く違和感は、その辺りに起因していたのかも知れない。

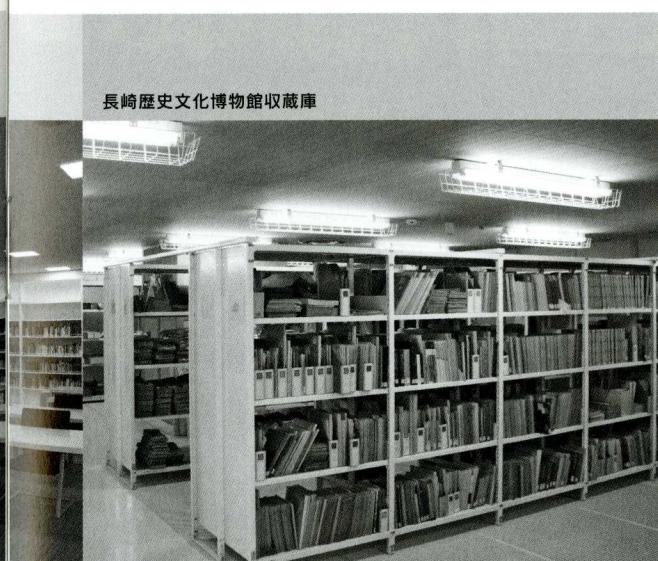
ができたという。そこに原本が大事に保管されていることが、島の人びとが自らの歴史を知ることを可能にしたのは、まさに、博物館冥利に尽きるといったところであろうか。

また、戦後間もなく刊行された壱岐に関するある図書には、「壱岐郷土研究所」のラベルとそれを主宰していた山口麻太郎への著者の献詞が貼り付けてあつた。山口は、壱岐にあって中央の研究者の地方軽視の調査研究を厳しく批判したことで知られる民俗学者である。そんな山口の旧蔵書に直接触れることが

資料閲覧室／長崎学相談コーナー。
博物館が所蔵する長崎関係資料を閲覧することができる



長崎歴史文化博物館収蔵庫



長崎歴史文化博物館全景

